

保育現場を訪れて・・・

こども教育学部 本山 益子

今年度は、9月に第2集をお届けしたところであるが、この度、臨時号を発行することになった。急な企画であったため、原稿の集まりが心配されたところであるが、4編の投稿をいただくことができ安堵している。さまざまな教育現場・保育現場での実践を踏まえた、あるいは、現場を見据えた研究が寄せられ、密かに喜んでいる。

言うまでもなく、本学部では小学校教諭・幼稚園教諭・保育士・保育教諭の養成を目指している。そのための養成教育と我々の研究は切り離せないだろう。つまり、対象となる発達段階の子どもについて、あるいは、それぞれの教育現場・保育現場について理解し、検討することが求められている。さらに、その成果を養成教育に還元することも期待されている。つまり、教育と研究が好循環していくことが理想であると言えよう。

ただ、コロナ禍のため、現場へ足を運ぶことも難しくなっている。先日、久しぶりに以前よりご縁のある幼稚園に足を運んだ。年長クラスの子どもたちがホールで生き生きと「洗濯物」になりきっていた。からだや動きで表現し、経験の浅い保育者が提示する世界を共有する中で、次々とイメージがあふれ物語を紡いでいた。その遊びは、まさに主体的であり、飽きることなく続いていった。そこで目にした子どもの様子や保育者の援助を、早速、授業に取り込み学生にも伝えた。講義において話す際、この現場に「居た」ことによって、より臨場感が伝わり、説得力が増したことを改めて感じることができた。ただ、そこで満足するのではなく、この現場での実践を踏まえ、自分の研究につなげることが必要なのだが・・・なぜなら、「感じ」としての説得力が「根拠」を伴う説得力になるからである。

そして、今回寄せられた研究は、そのような教育現場・保育現場、あるいは、養成教育の現場（大学）、さらには、子どもを対象とした「英語教育」「キャリア教育」について検討されたものであり成果である。この成果が、確固たる説得力を持って養成教育に還元されることを楽しみに待ちたい。

